

鹿児島（鶴丸）城跡について

1 鹿児島城の歴史

鹿児島（鶴丸）城は、初代薩摩藩主島津家久が、関ヶ原の合戦直後の慶長6（1601）年頃に築城を始め、慶長末（1615）年頃にほぼ完成したとされています。

城の正式な名称は鹿児島城で、「鶴丸城」の呼称は、背後の城山の形が、鶴が舞っているように見え、鶴丸山と呼ばれたことに因むと、江戸時代後期の『三国名勝図会』には記されています。

本来の鹿児島城は、背後の山城（上之山城）と麓の居館からなり、江戸時代前半の絵図では、山城部分の曲輪を本丸、二丸（二之丸）とし、麓の居館は居所（居宅）と記しています。

江戸時代を通じて藩政の中心を担ったのは麓の居館部分で、江戸時代後半には、現在黎明館がある三方を石垣と濠に囲まれた藩主の居館を本丸、その西側を二之丸と呼ぶようになりました。

また、天明5（1785）年から、8代藩主島津重豪により、二之丸の整備拡大が図られました。

その後、明治に入り、明治2（1869）年に知政所となり、明治4（1871）年の廃藩置県で12代藩主島津忠義が去るまで、270年余り島津氏の居城として、近世鹿児島の発展の中心でしたが、本丸は明治6（1873）年の火災で、二之丸は明治10（1877）年の西南戦争で焼失しました。

明治中期以降は、居館跡に中学造士館、次いで第七高等学校造士館が設置され、戦後は鹿児島大学の文理学部、次いで医学部がありましたが、昭和58（1983）年に黎明館が開館しました。

2 鹿児島城の特色

① 内枘形と御楼門跡

突進して来る敵を防ぐために、門の内側を直角に折り曲げた枘形を造っています。周囲の石垣は「切り込みはぎ」※1という手法で積み上げ、隅の部分は「算木積」※2の工法が用いられています。御楼門跡の礎石には、門の柱に巻いた鉄板の錆跡が残っています。

※1 築石（平石）の合端（築石どうしが接する部分）を削り、隙間の少ない石垣を積み上げる手法

※2 隅角部にかかる石垣の重量を左右に分散するため、直方体の石の小面と大面を積む方法

② 石橋と濠

鹿児島城は、県内では珍しい高石垣と濠が築かれた城郭です。石垣は水面から高さ7～8mで、約70度の直線的な勾配※3をとり、総延長は約500mです（石垣上部での計測）。

居館前の橋は当初は木橋でしたが、文化7（1810）年に現在の石橋に架け替えられました。

※3 下部は傾斜が緩く、上にあがるにしたがって傾斜が垂直に近づく石垣で、武者返しとも言われる。

③ 鬼門避け（隅欠）

県民交流センター側の石垣隅は、角を切り取った形になっています。これは、城の北東に当たる「鬼門」とみなし、その災厄を除こうとしたと考えられ、「隅欠」と呼ばれます。

④ 御角櫓跡

南西側の石垣の隅角部にあった南北21.6m、東西5.4mの櫓で、嘉永6（1853）年6月15日に、13代将軍徳川家定の御台所となる篤姫が、ここから祇園祭を見たとの記録があります。



鹿児島（鶴丸）城跡における鹿児島県取組について

現在、県では、鶴丸城跡の石垣の保全整備や御楼門・御角櫓の建設に向けた取組を実施しています。

■ 「鶴丸城跡保全整備事業」について

1 事業の目的

県指定史跡「鶴丸城跡」（昭和28年指定）の石垣には、樹根の張り出しなど様々な要因により、部分的な孕み（はらみ）出しや隙間などが発生しています。

このため、順次、石垣の現況調査・測量・設計を実施した上で、修復工事を行い、その保全を図ることとしています。また、併せて、埋蔵文化財発掘調査を実施しています。

2 平成28年度の事業対象箇所と内容

今年度は、御楼門部の石垣修復工事を実施するとともに、御角櫓跡周辺部（黎明館西側）及び北御門部の修復に向けた事前調査・測量・設計を実施しています。

また、埋蔵文化財発掘調査を対象箇所において実施しています。

＜御楼門部の石垣修復工事＞

- ・石垣清掃の上、傷んだ石の表面処理や保存化学処理等による補修を行う。
- ・雨水や地下水の影響による石垣の劣化を防ぐため、排水溝等の機能を回復する。

＜埋蔵文化財発掘調査＞

- ・御楼門部：石垣背面や排水溝の状況等を把握するための調査を実施
- ・御角櫓跡周辺：石垣の状況を把握するため、堀跡などの発掘調査を実施

■ 「御楼門」及び「御角櫓」の建設について

鶴丸城の正門であり、明治6年の火災により焼失した御楼門の復元については、民間主導による復元計画に基づき平成25年から寄附金の募集が開始され、平成26年7月には、目標額の4億5千万円を超えました。

県では、この取組は、官民連携のモデルの一つとして、また、歴史、文化、建築技術の継承などのほか、新たな観光拠点としても意義のあるものとして、平成27年2月、県と民間の鶴丸城御楼門復元実行委員会とで「鶴丸城御楼門建設協議会」を設立し、現在、平成32年3月の完成を目指し、官民一体となって必要な取組を進めています。

また、御楼門に連なり城郭を構成する重要な要素である御角櫓について、県において建設することとしています。

＜取組内容＞

- ・「鹿児島（鶴丸）城保存活用計画」の策定（H27年度）
- ・基本設計・実施設計の作成（H27～28年度）
- ・建設に必要な大径木の調達（H27～）
- ・御楼門の建設（H29～31年度）
- ・御角櫓の建設（H30～31年度）



御楼門完成イメージ図



⑥能舞台跡

鹿児島城跡関係の略年表 1
【～幕末】

西暦	和暦	主なことがら
南北朝時代		
		城山に、上山氏によって上山城が築かれる
1600	慶長5	関ヶ原の戦い
1601	慶長6	島津家久が鹿児島(鶴丸)城の築城を始める(1602年説あり)
1604	慶長9	島津家久が内城から鹿児島城に移る
1606	慶長11	居館正面板橋の渡り初め
1612	慶長17	御楼門の柱立
1639	寛永16	城内の屋敷の建て替え、石垣修復
1664	寛文4	鹿児島城南方の石垣二箇所が崩壊
1696	元禄9	鹿児島城下で大火、城内に延焼、鹿児島城本丸焼失
1707	宝永4	鹿児島城本丸再建工事終了
1773	安永2	藩校造士館・演武館が完成(現在の中央公園)
1785	天明5	島津重豪、二之丸の整備拡大を始める
1791	寛政3	二之丸の庭園を含む大工事が完了
1810	文化7	御楼門前の板橋を石橋に架け替える
1843	天保14	御楼門の建て直し(1844年説あり)
1863	文久3	薩英戦争、本丸大奥二階や御楼門に被弾



⑦図書館側石垣

鹿児島（鶴丸）城跡遺構配置図及び見学コース

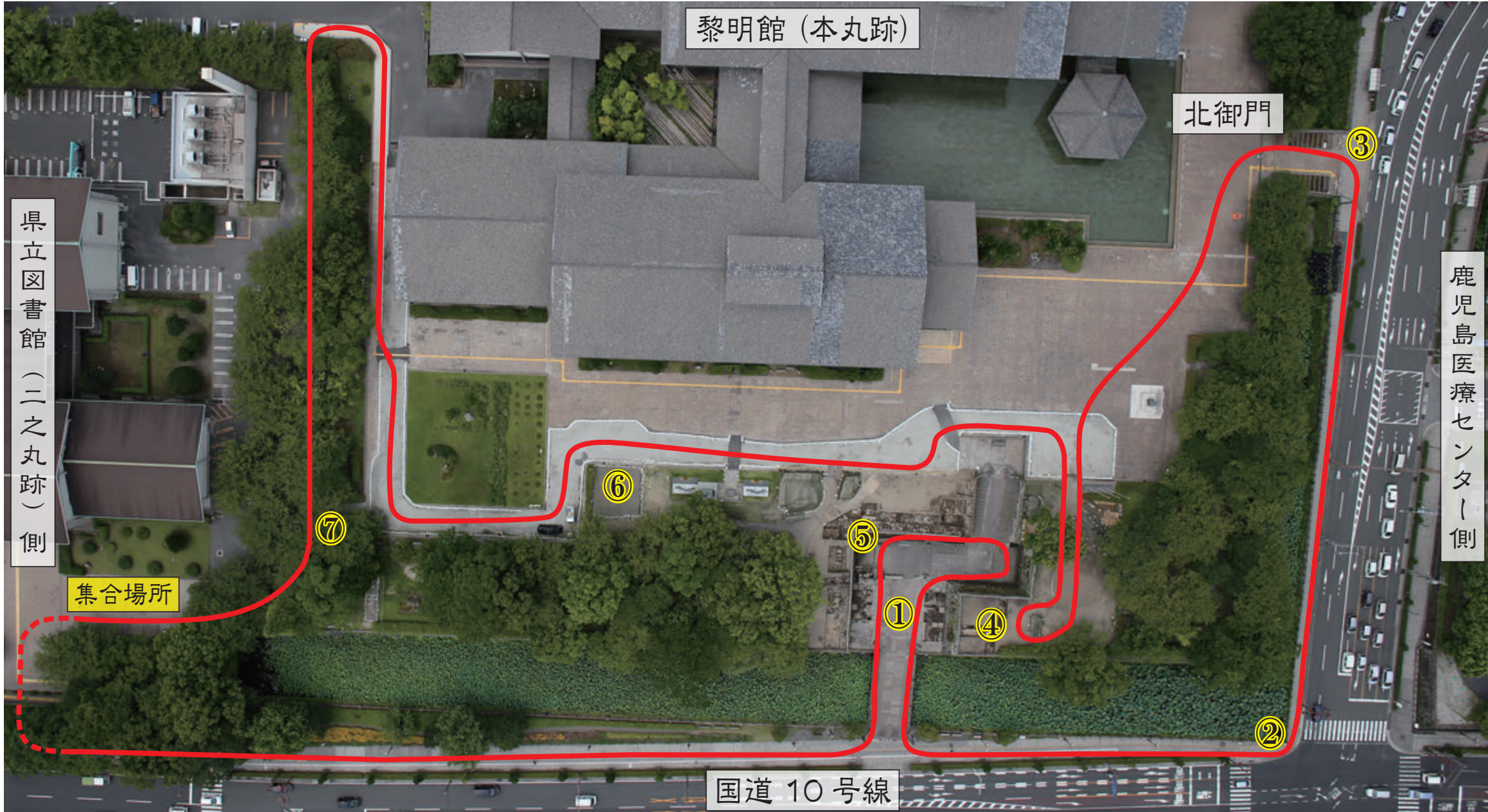
島津氏の居城である鹿児島（鶴丸）城跡は、現在、石垣修復に伴う発掘調査を実施しています。調査結果から、近世薩摩藩の政治・文化の中心地として、さらに西南戦争の激戦地としての様相が少しずつ明らかになってきました。



⑤石垣と排水溝跡

鹿児島城跡関係の略年表 2
【明治～】

西暦	和暦	主なことがら
1871	明治4	廃藩置県 鎮西鎮台第二分営が置かれる
1872	明治5	明治天皇行幸
1873	明治6	鹿児島城本丸が焼失
1877	明治10	西南戦争、二之丸が焼失
1884	明治17	(県立)中学校造士館設立
1901	明治34	(官立)第七高等学校造士館設立
1945	昭和20	空襲により校舎焼失、石垣一部崩壊
1952	昭和27	鹿児島大学文学部焼失
1957	昭和32	鹿児島大学医学部、鴨池より転入
1960	昭和35	石垣一部崩壊
1974	昭和49	鹿児島大学医学部、宇宿へ移転
1978	昭和53	鹿児島城跡本丸跡発掘調査(～1979まで)
1983	昭和58	鹿児島県歴史資料センター黎明館開館
1999	平成11	御角櫓跡発掘調査、石垣修復(～平成12年)
2015	平成27	鹿児島城跡発掘調査開始



- ① 御楼門跡： 暗渠排水溝や門番が待機していた番所跡が確認され、御楼門の基礎部分がどのような構造になっていたかがわかりました。また、石垣には、西南戦争の時のものと考えられる銃弾・砲弾の痕跡が確認されました。中には、砲弾の破片が石垣にそのままめり込んでいるものまでありました。
- ④ 横矢掛け跡： 武器類の保管や戦時の際に城壁の役割も果たす「兵具所(ひょうぐしょ)」跡を確認しました。兵具所跡の周りには、雨落ちと考えられる石畳と排水溝が巡っていました。また、1927(昭和2)年に建てられた第七高等学校造士館時代の天文観測室跡も確認しました。
- ⑤ 排水溝跡： 石垣の前面と背面には、石垣に沿って排水溝が巡っていました。城の中にたまった水をいかに堀に流すか、ということにとっても気を使っていたようです。
- ⑥ 能舞台跡： 能舞台の「橋掛け」跡を確認しました。「橋掛け」とは、舞台と鏡の間(楽屋)を結ぶ廊下で、今回はその床面が確認されました。音響効果を高めるために、床面は溝状で、硬い土の面の上に漆喰を敷き固めていました。
- ⑦ 図書館側石垣： 地面より下まで石垣が続いていることがわかりました。また、県立図書館建設に伴う発掘調査で確認されていた内堀と、内堀から外堀へ流れる水の量を調節するための井堰も確認しました。



①御楼門跡



④横矢掛け跡